

飯村隆彦の映像アート The film and Video of Takahiko Iimura

主催: 国立国際美術館

協賛: ダイキン工業現代美術振興財団

●第12回中之島映像劇場を開催いたします

第12回中之島映像劇場では、日本の実験映像・メディアアートのパイオニアであり、今なお精力的に活動をつづけている飯村隆彦氏の映像作品を特集上映いたします。飯村氏は、1960年代初頭、戦前のヨーロッパ前衛映画やアメリカ実験映画が日本で紹介される前から映画制作を開始し、当時の前衛芸術家と交流を持ちながら、独自の視点と立場で作品を作ります。1964年には、ドナルド・リチー、大林宣彦、高林陽一らと日本初の実験映画の制作・上映組織「フィルム・アンデパンダン」を組織し、自分達の作品を上映するだけでなく、「2分間フィルムフェスティバル」など、ジャンルを横断した映画祭を催します。1966年に草月アートセンターらによって、日本において海外の前衛映画・実験映画の紹介が本格化するのと入れ替わるように渡米し、活動の拠点をニューヨークに置くようになります。インスタレーションやパフォーマンスという言葉がコンテンポラリーアートの用語となる前からこれらの映像関連作品を制作し、ビデオアートも最初期から作品を発表している飯村氏は、日本のメディアアートを牽引してきたアーティストと言えるでしょう。また、現代アートや映像の批評および紹介者としても重要な仕事をしており、特に60年代から70年代にかけてのニューヨークを中心としたアメリカ芸術動向のルポは、アーティストでないと語りえない慧眼と洞察力にあふれるものです。今回は、飯村氏の多様な映像作品を時代と傾向によって4つのプログラムに分けて紹介いたします。現在、メディアアートという言葉は、主にコンピュータを応用したテクノロジーや、アニメ、ゲームなどのエンターテインメントとの関わりで用いられていますが、一度見直してもよい時期に差しかかっているかもしれません。そのとき、飯村氏の仕事は、重要な指標として、私たちに考える手掛かりを与えてくれるでしょう。

●飯村 隆彦

1937年東京都生まれ。映像、現代美術、メディアアートの領域を横断する先駆的な仕事と国際的な活躍で日本を代表する映像作家・メディアアーティスト。2015年には、アーティストおよび評論家としての活動が評価され、第19回文化庁メディア芸術祭功労賞を受賞した。



■ Aプログラム: 24日(土) 13:00から

「初期映画作品」

日本の実験映画のパイオニアとして、1960年代初期のストーリーを排した視覚的映画

《くず》1962年、8mm→16mm、8分、白黒、音楽:小杉武久

《いろ》1962年、8mm→16mm、12分、カラー、音楽:刀根康尚

《タタ62》1962年、8mm→16mm、10分、白黒、サイレント

《ド・サド》1962年、8mm→16mm、10分、白黒、サウンド

《Ai(Love)》1962年、8mm→16mm、10分、白黒、音楽:オノ・ヨーコ

《オナン》1962年、8mm→16mm、7分、白黒、音楽:刀根康尚

■ Bプログラム: 24日(土) 15:00から

「シネダンスと様々な実験」

舞踏をはじめ、手持ちカメラによる動きと合体したアクション・カメラを使った作品。

《あんま》1963-2001年、8mm→16mm(16fps)、15分、白黒、サイレント

《バラ色ダンス》1965-2001年、8mm→16mm(16fps)、13分、白黒、サイレント

《さかさま》1963年、8mm→16mm(16fps)、14分、白黒、サイレント

《リリパット王国舞踏会》1964年、16mm、12分、白黒、サウンド

※2面スクリーンにて上映

《私は影を見た》1966年、8mm→16mm(16fps)、13分、白黒、サイレント

《うらとおもて》1964年、16mm、2分、白黒、サイレント

《マイ・ドキュメンタリー》1964年、16mm、2分、白黒、サイレント

■ Cプログラム: 25日(日) 13:00から

「ミニマル/コンセプチュアル」

最少のイメージで、映像のコンセプトを深めた視覚/哲学的な映画とビデオ

《フィルム・ストリップス I & II》1966-70年、16mm、22分、白黒、サウンド:飯村隆彦

《イン・ザ・リバー》1969-70年、16mm、17分、カラー、サウンド:飯村隆彦

《椅子》1970年、ビデオ、7分、カラー、サウンド:飯村隆彦

《まばたき》1970年、ビデオ、2分、白黒、サウンド:飯村隆彦

《タイム・トンネル》1971年、ビデオ、5分、白黒、サウンド:飯村隆彦

《オブザーバー／オブザーブド》1976年、ビデオ、24分

白黒、サウンド:飯村隆彦

■ Dプログラム:26日(日)15:00から

「映画の構造とシステム」

映画の時間とビデオによる交信を眼前化した映像アートの新局面

《シャッター》1971年、16mm、25分、白黒、音楽:佐藤敬次郎

《1秒間24コマ》1976年、16mm、12分、白黒、サウンド:飯村隆彦

《トーキング・ピクチャー》1981年、ビデオ、15分、音声:飯村隆彦

《スクリーン・プレイ》1963年、ビデオ、10分、サウンド:飯村隆彦

「初期映画作品」

日本の実験映画のパイオニアとして、1960年代初期のストーリーを排した視覚的映画。

飯村は大学卒業後、映画制作会社(日本映画新社)に入社するも、仕事とは無関係に8ミリカメラで独自に作品制作を始めます。学生時代から詩と美術に関心を持っており、その両者を橋渡しするメディアとしての映画を意識しています。赤瀬川原平、中西夏之、高松次郎、風倉匠ら同世代の前衛芸術家たちとの交流から、作品制作のインスピレーションを得たり、コラボレーションをおこなったりしています。このとき戦前のヨーロッパ前衛映画やアメリカで盛り上がりつつ合った実験映画は、まだ日本では紹介されていませんでしたが、飯村は雑誌などのニュースを通じて、情報として得ていました。

《くず》1962年、8mm→16mm、8分、音楽:小杉武久

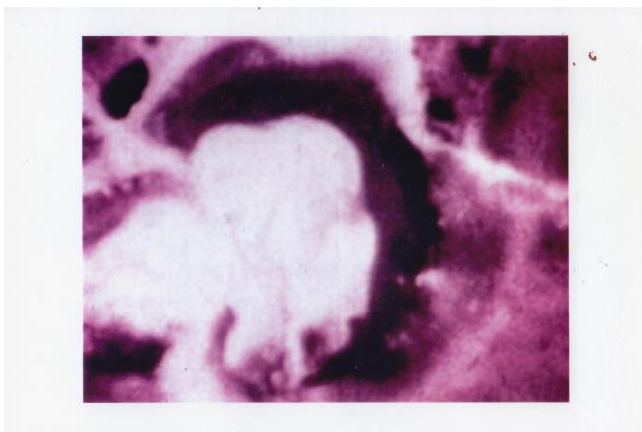
飯村隆彦の映画第一作。東京、晴美海岸に打ち捨てられた大小さまざまな廃棄物、鳥獣の屍骸、子どもたちが、手持ちの8ミリカメラで撮影される。即興的なカメラワークで捉えることにより、死んだものが生命感をもって映像のなかで蘇る。同時に手持ちカメラ撮影の身振りそのものが、飯村自身の社会参加する方法であり、以降の作品にも共通する問題意識です。



《いろ》1962年、8mm→16mm、12分、カラー、音楽：刀根康尚

液体に垂らされた色彩の変化と消滅を捉えた抽象的な映像。

1963年12月に草月アートセンターで開催された「Sweet16」で上演されたフィルム・パフォーマンス《スクリーン・プレイ》では、美術家・高松次郎の背中に投影された。本プログラムでは映画作品として上映します。



《タタ62》1962年、8mm→16mm、10分、白黒、サイレント

応募作品をすべて展示する「讀売アンデバンダン展」は、当時の前衛美術家にとって重要な発表の場であった。1962年の同展の記録であるが、ここに対象の説明的な描写はなく、クローズアップによるオブジェやパフォーマンスの切り取りは、ネオ・ダダに対する参加方法であった。



《ド・サド》1962年、8mm→16mm、10分、白黒、サウンド

マルキ・ド・サドの小説の場面を描いた版画を元に構成された映画。複写された背徳的イメージ。



《Ai(Love)》1962年、8mm→16mm、10分、白黒、音楽：オノ・ヨーコ

極端なクローズアップで撮影された男女の身体。タイトルから男女の性行為が暗示されるが、男女の性差、何の部位が写っているのか判然としない。8mmフィルムから16mmフィルムにブローアップすることでコントラストが強調され、被写体である肌の質感とフィルムの粒状性の肌理が、スクリーン上で拮抗する。当初サイレントであったが、この作品を気に入ったオノ・ヨーコの即興的な録音によるサウンドトラックが付け加えられる。



《オナン》1962年、16mm、7分、白黒、音楽：刀根康尚

美術家・中西夏之演じる青年の鬱屈した性の衝動。やがて彼は大きな卵(中西のオブジェ作品)を生む。飯村作品では例外的に明確な物語性があり、またはじめて16mmカメラで撮った作品でもある。ブリュッセル国際実験映画祭特別賞受賞(1964年)



「シネダンスと様々な実験」

舞踏をはじめ、手持ちカメラによる動きと合体したアクション・カメラを使った作品。

土方巽の舞踏公演を記録で飯村は自ら舞台上上がり、踊り手たちの合間を手持ちカメラで移動しながら撮影しました。それはカメラによる社会参加の方法を発展させた行為で、自ら「シネダンス」と名付けています。

1964年映画作家の大林宣彦、高林陽一、ドナルド・リチー、批評家の石崎浩一郎、佐藤重臣らとフィルム・アンデパンダン展を組織し、新宿紀伊国屋ホールで映画祭を開催します。これは無審査出品を原則とした「讀賣アンデパンダン展」が前年度を最後に中止されたことを受け、前衛芸術の発表の場を用意する意図が含まれていました。この映画祭では2分間の、超短編映画の公募部門が設けられ、映画以外の他のジャンルの芸術家にも参加を呼びかけ、赤瀬川原平(美術)、刀根泰尚(音楽)らが出品している。

《シネダンス：あんま》1963-2001年、8mm→16mm、15分、白黒、サイレント

1963年草月ホールで上演された土方巽の舞踏の記録。飯村の「シネダンス」であると同時に同公演の唯一の動画記録でもある。1963年に一度完成しているが、のちに未使用のフィルムを追加し、2001年に今回上映する完成版ができています。出演：土方巽、大野一雄、大野慶人、笠井勲



《シネダンス：バラ色ダンス》1965-2001年、8mm→16mm(16fps)、13分、白黒、サイレント

1965年日本青年館で上演された土方巽舞踏の記録。出演：土方巽、大野一雄、大野慶人、石井満隆、笠井勲



《さかさま》1963年、8mm→16mm(16fps)、14分、白黒、サイレント



《リリパット王国舞踏会》1964年、1966年、16mm、12分、白黒、サウンド ※2面スクリーンにて上映

短い断章で区切られた美術家・風倉匠のパフォーマンス。一つのパフォーマンスを長廻しで撮影したワンシーン・ワンショットの映像が、それぞれの章となっている。上映の度に、これらの章の順番を入れ替えて映写することが当初の意図に含まれていたが、実施はしていない。1966年に現像所のミスで、露出オーバーが含まれるプリントができてしまうが、飯村はこの偶然に出来たプリントを1964年版と異なる順番で編集した《リリパット王国舞踏会 No.2》を作り上げる。今回はこの2種類のプリントを2台の映写機を同時に使い、2面スクリーンで上映します。



《私は影を見た》1966年、8mm→16mm(16fps)、13分、白黒、サイレント

高松次郎の「影」の絵画に触発されて制作された作品。撮影者自らの影が主たる撮影対象で、彷徨の末、高松の絵画に辿りつく。撮影による社会参加がここでは自己言及的に繰り返されているようです。



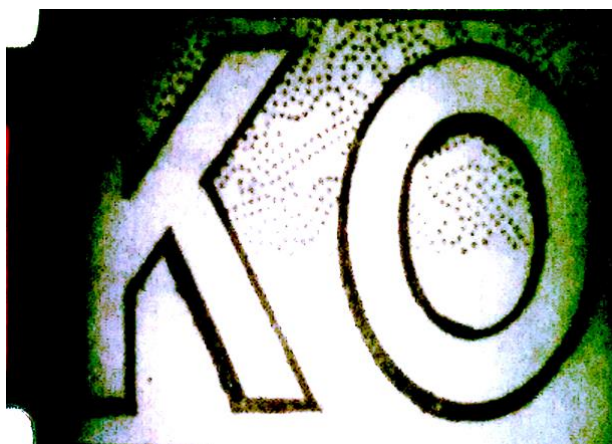
《うらとおもて》1964年、16mm、2分、白黒、サイレント

フィルム・アンデパンダンに出品するために制作された2分の作品。前半部は、ハリウッド・スターの肖像が、素早いカットで映し出されるポップな映像。後半になると一転して人体の皮膚をクローズアップした写真になる。人間の表面的な部分と、隠され部分を暴くイメージの対比。



《マイ・ドキュメンタリー》1964年、16mm、2分、白黒、サイレント

フィルム・アンデパンダンに出品するために作られた短編作品。新聞の見出しと記事をアトランダムにつないだコラージュであり、映画によるカットアップによって構成された具体詩。ダダ的発想で作られているが、意味と無意味の間を揺れる文章が思わぬ効果も生み出している。



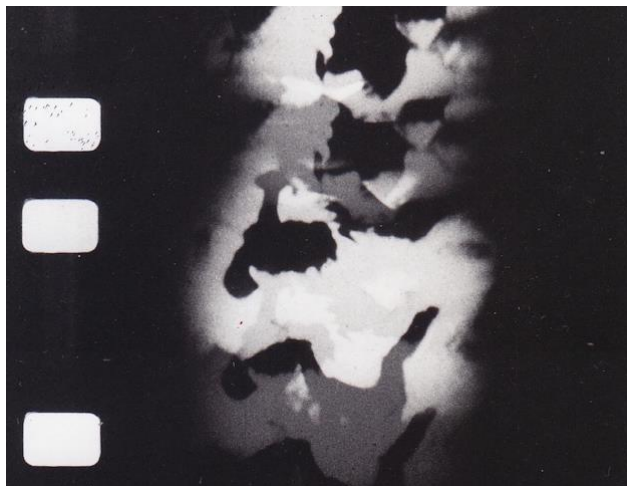
「ミニマル/コンセプチュアル」

最少のイメージで、映像のコンセプトを深めた視覚/哲学的な映画とビデオ。

1966年にニューヨークに渡った飯村は、そこで多くの実験映画を見、そして芸術動向に直接触れることになります。様々な作品体験や芸術家との交流、日本とは異なる社会や文化の中で飯村の作品は思索的な傾向を更に増していきます。それはミニマルな外観とコンセプチュアルな意図を有しながら、同時に瞑想的でもありました。

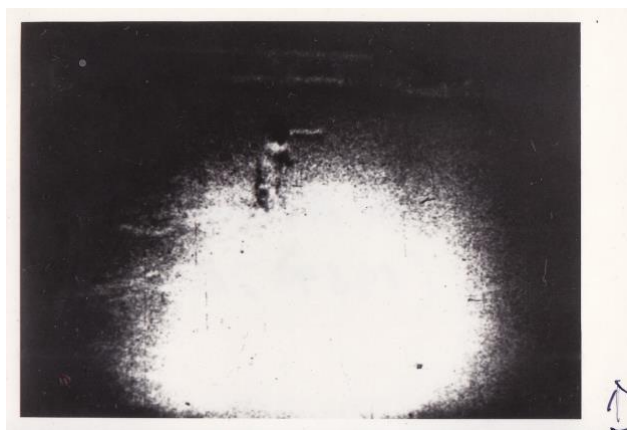
《フィルム・ストリップス I & II》1967-70年、16mm、22分、白黒、サウンド:飯村隆彦

1967年に完成した自作《サマー・ハプニングUSA》を素材に、短いフッターを抜き出し、変形させながら分析的に繰り返して構成された作品。《I》はヒッピー運動、《II》は黒人暴動の箇所が抜き出されている。構造映画の動向に触発されて制作されています。



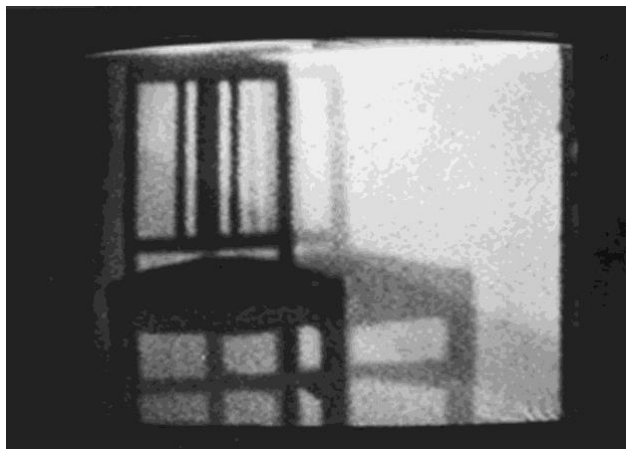
《イン・ザ・リバー》1969-70年、16mm、17分、カラー、サウンド:飯村隆彦

1969年、ヨーロッパ上映旅行から日本に帰国する途中で立ち寄ったカトマンズで撮影した旅行のスナップ。この8mmフィルムの短いフッターを素材に、編集用ビューワーを手回して操作することによって生じる独特のコマの推移を映画化しています。沐浴する人物の動作が、反復・持続します。



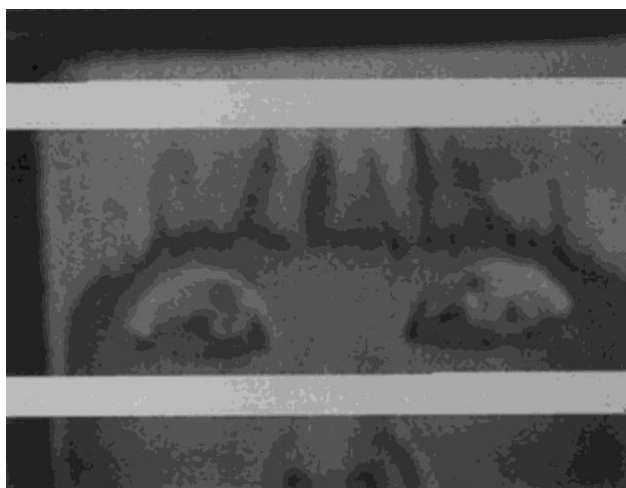
《椅子》1970年、ビデオ、5分、カラー、サウンド:飯村隆彦

1 脚の椅子とその影が映し出され、影が明滅する作品。



《まばたき》1970年、ビデオ、2分、白黒、サウンド:飯村隆彦

目元をクローズ・アップで撮影した映像を、ポジとネガを反転させ、再生スピードを操作して制作された。出演:飯村昭子



《タイム・トンネル》1971年、ビデオ、5分、白黒、サウンド:飯村隆彦

フィルムのカウント・リーダーをモニターに映し、そのモニターをカメラで映しフィード・バック機能を使い、さらに数字をカウントする。



《オブザーバー／オブザーブド》1976年、ビデオ、24分

白黒、サウンド:飯村隆彦

《Camera, Monitor, Frame》(1976年、ビデオ、白黒、20分、サウンド、出演:飯村隆彦)、《Observer/ Observed/》、《Observer/ Observed/ Observer》(1976年、ビデオ、白黒、19分、サウンド、出演:飯村隆彦、飯村昭子)で構成されている。

さらに《Camera, Monitor, Frame》は、《This is a camera 1》、《This is a camera 2》、《This is a monitor 1》、《This is a monitor 2》、《To See The Frame》で構成され、

《Observer/ Observed/》は、《Observe/Observed》、《Seeing /Not Seeing》、《She Sees /Seen》で構成されている。3部作の最後である《Observer/ Observed/ Observer》は、《I See You / Myself》、《Camera1/2 -Monitor1/2》、《Camera2-Camera1 / Monitor1/2》で構成されている。

カメラ、モニター、被写体を撮影し、言語は音声とテロップで示される。本作を「ビデオの記号学」と飯村は考えており、言語と映像の関係をビデオのシステムを使用し制作している。

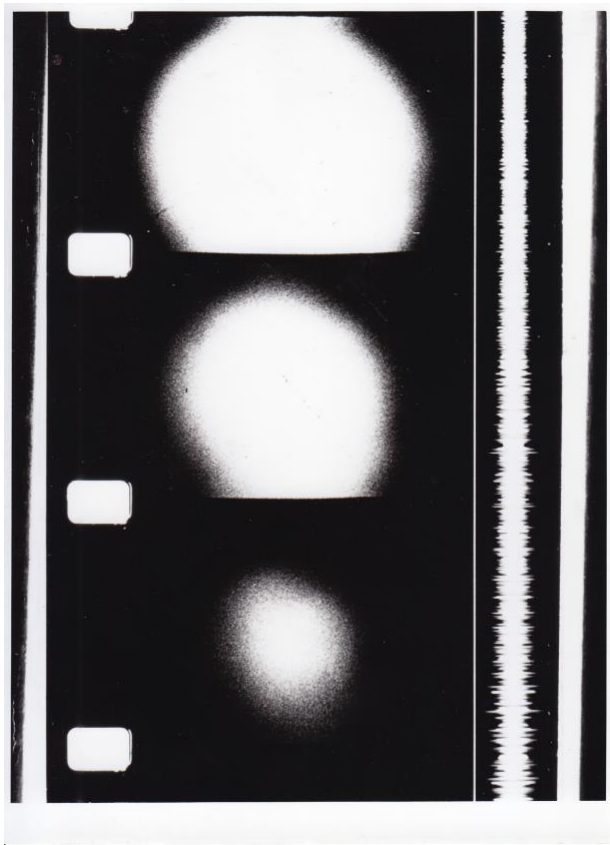
「映画の構造とシステム」

映画の時間とビデオによる交信を眼前化した映像アートの新局面。

飯村は、映画フィルムとビデオの両者で制作するようになりますが、このことによってそれぞれのメディアの性質をより意識した内容になっていきます。

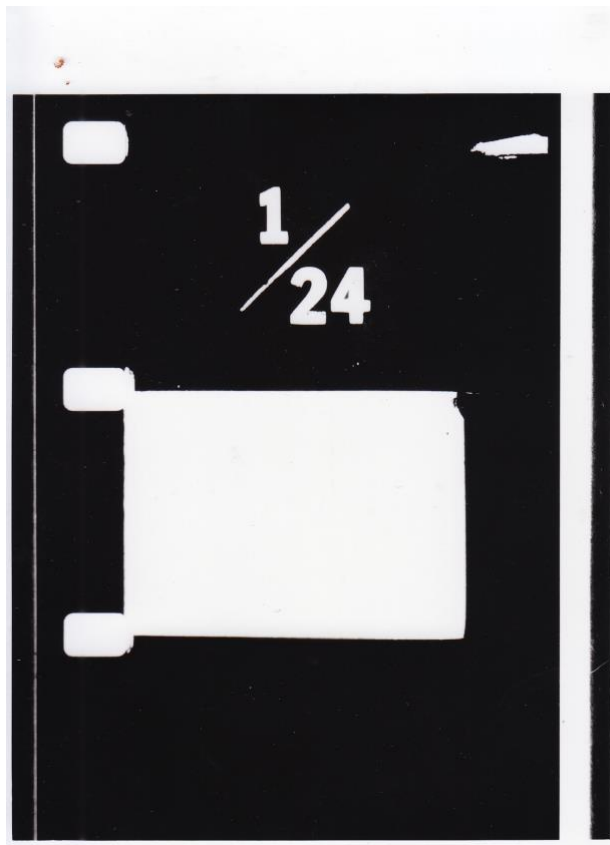
《シャッター》1971年、16mm、25分、白黒、音楽：佐藤敬次郎

フィルムをかけていない映写機を、映写速度を変化させながら映写し、スクリーンに投影される白い光を映画カメラで撮影する。映写機と映画カメラのシャッターの開閉が同期しないため、何も映っていないが明滅する映像効果が得られる。映画のシステムを内省的に扱った作品。



《1秒間24コマ》1976年、16mm、12分、白黒、サウンド：飯村隆彦

フィルムの黒味(黒コマ)と素抜け(白コマ)及びその比率を示す数字で構成された映画。24コマ(1秒)を単位として、数字は黒味と素抜けの比率が厳密に組み合わせられている。数学的厳密さと人間の知覚とのズレも興味深く体験できる。



《トーキング・ピクチャー》1981年、ビデオ、15分、音声：飯村隆彦

このビデオ作品には「映画を見ることの構造」というサブタイトルがついています。作家自身が真っ白なスクリーンに向かって状況を語るが、その立場はビデオカメラの前にいた作者自身でもあり、映像の中のスクリーンに映る影でもあり、再生される映像そのもの、あるいはこの作品を上映する主体でもある。それは、観客の立場を巻き込んで「映画を見ること」そのものを問い直す問いとなって行く。



《スクリーン・プレイ》1963年、ビデオ、10分、サウンド:飯村隆彦

1963年12月に草月アートセンターで開催されたパフォーマンス・アートの催し「SWEET16」で上演されたフィルム・パフォーマンス。「スクリーン・プレイ」という語は、映画用語でシナリオを指す言葉だが、飯村は全く異なる意味でこの語を用いています。美術家・高松次郎の背中に抽象映画《いろ》が投影され、飯村が投影されたフレームに沿って、ゆっくりと鉋で衣服を切り取っていく。最後には露出した肌に映画が投され、フィルムの色彩で染まった皮膚が現れる。今回は、近年の再演の記録を上映いたします。

